

巻 頭 言

精神医療奨励賞と精神医学奨励賞

大森哲郎 日本精神神経学会理事
Tetsuro Ohmori

日本精神神経学会は、その年までに精神医療の発展に貢献した会員（あるいは団体）に精神医療奨励賞を、その年に優れた原著論文を発表した40歳未満の会員に精神医学奨励賞を授与している。この表彰は必ずしも会員周知ではないので、あらためて紹介しておきたい。

両奨励賞は、国立精神神経センターの初代総長を務められた故島園安雄先生のご遺志を尊重し、そのご家族からのご寄付を基金として平成10年に発足した。受賞者は総会で講演を行い、理事長から賞状と受賞理由が記された盾が贈られる。

精神医療奨励賞の何たるかは、これまでの受賞団体が如実に物語っている。第1回目の平成10年は「浦河べてるの家」（川村敏明）、11年はエスポアール出雲クリニック痴呆老人デイケア「デイハウス・エスポアール小山」（高橋幸男）、14年は障害者総合リハビリテーションセンター「麦の郷」（百溪陽三）とみなとネット21（村上雅昭）、15年は医療法人慈圭会（菅野圭樹）と日本てんかん協会（八木和一）、16年はSST普及協会（西園昌久）と沖縄県立八重山病院精神科（葛山秀則）、17年は社会福祉法人稚内木馬館（千秋勉）、18年はひょうご被害者センター（岩井圭司）、20年は草思会クボタクリニック（窪田彰）、21年は正光会御荘病院およびNPO法人ハートinハートなんぐん市場（長野敏宏）、23年はメンタルヘルス・ファーストエイドジャパン（MHFA-J）チーム（大塚耕太郎）、24年は相双に新しい精神科医療保健福祉システムをつくる会（丹羽真一）、25年は震災こころのケア・ネットワークみやぎ（原敬造）である（括弧内は団体の代表会員、敬称略）。

地域でユニークな活動を続けている診療施設があり、啓発普及活動に努める団体があり、また最近では震災被災地の支援活動がある。平成12、13、19、22年と該当がないのは、適切な推薦がなかったり、微妙に水準に達しないと判断されたりしたためだ。選考の常で優れた団体が次点に残ってしまうこともある。会員の優れた活動は受賞団体に限らない。

精神医学奨励賞の受賞者も紹介しておこう。敬称は略し、対象と方法を一句に凝縮し、論文の掲載誌を括弧内に表示する。第1回目の平成10年は平安良雄、統合失調症の画像学（Am J Psychiat）、平成12年は野原茂、統合失調症の画像学（Schizophr Res）、平成14年は橋本亮太、リチウムの神経保護作用の3研究（J Neurochem, Neuropharmacol, Neurosci）、平成15年は安野史彦、海馬セロトニンと記憶の研究（Am J Psychiat）、平成17年は澤田健、統合失調症とComplexinタンパクの研究（Arch Gen Psychiat, Brain Res）、平成18年は高橋努、統合失調症の3画像研究（Schizophr Res, Schizophr Res, Psychiatry Res）、平成19年は加藤隆弘、抗精神病薬とマイクログリアの研究（Schizophr Res）、平成20年は平野昭吾、統合失調症の脳磁図（J Neurosci）、平成21年は小林啓之、精神病前駆期の2研究（Schizophr Res, J Clin Psychopharmacol）、平成22年は池田匡志、統合失調症の分子遺伝学の3研究（いずれも Biol Psychiat）、平成23年は小原知之、脂質代謝と認知症の2研究（Neurology, J Am Geriatr Soc）、平成24年は小田祐子、双極性障害の脳磁図（PLoS ONE）、平成25年は竹内啓善、統合失調症の臨床薬理学の3研究（Schizophr Bull, Schizophr Res, J Clin Psychiat）と木下誠、統合失調症のエピジェネティックスの2研究（Neuro-Molecular Med, Epigenetics）である。

並べてみると統合失調症を対象とした研究が多いのは、画像学や遺伝子解析がその病態解析に貢献したここ十数年の研究動向が関連しているのだろう。平成11、13、16年は該当がなかった。これまた選考の常で極めて優れた論文でも微妙な兼ね合いで選出されないことがある。基礎と臨床は問わないが、平成19年からは原則として国内遂行の研究を選考対象としているので、NatureやScience誌に掲載された論文でも留学先の研究は選から漏れることがある。

両奨励賞とも、平成26年からは推薦資格者が代議員からすべての会員に広がった。会員の皆様からの積極的なコメントをお願いしたい。